父の戒め

——菊池幽芳の「己が罪」と島崎藤村の「破戒」の比較——

陳 光

(一)

島崎藤村の「破戒」が出版されたのは七年前、同じく父親の素性を隠せという戒めを破って告白した物語を取り扱った小説があった。それは明治三二年—三三年「大阪毎日新聞」に連載された菊池幽芳の新聞小説「己が罪」である。その梗概を述べて置く。

大阪の豪農の娘箕輪環は母を喪って以来、父の手一つで愛育された。十四歳の時上京、女学校に在学中、福島素封家出身の医学生の子塚口虔三に欺かれて、その子を宿していた環は虚偽が分かり、苦悶の末、隅田川に投身しようとするところを一老女に救われた。後、一子玉太郎を生んだが房州の漁家にあずけて里子とする。ヒステリー症に悩み、父の許に帰って静養するうちに、父親から、欺かれて子を生んだことを隠せと戒められて、過去を隠して、櫻戸隆弘と結婚、子爵夫人となり、一子正弘をもうけて生活はしばらく幸福だったが、つねに過去隠匿の良心の苛責と恐怖に堪えていた。偶々房州海岸に遊んで七歳になった正弘を失い、正弘とともに溺れた

漁夫の子——玉太郎はわが子であることを知るに及び、環は悲痛を抑え難く、子爵に過去の秘密を悉く告白して懺悔した。厳格な子爵は環と疎隔するに至り、一家の上に暗い影が漂ったが、環の父親が子爵に対する申訳のために自殺し、また、環の献身的な愛情が子爵を動かして、再度圓滿な家庭をつくった。

「己が罪」は明治三三年—三四年、前中後三冊として春陽堂によって刊行された。「当時擡頭して来た家庭小説中の傑作として大に迎へられた」(『日本文学大辭典』第一卷藤村作篇)。『當時の新聞小説中、遥かにレベルを抜くものであった。その成功した點は、可憐な環を中心として心理描寫に觸れ、時代の流行・趣味などを採り入れ、態度が眞面目で(中略)「不如歸」について當時最も多く讀まれたもので、屢々新派によつて上演され、一層この作の人氣を高めた」(同上)。このように多く読まれ、広く影響を及ぼした告白の物語が「破戒」出現の七年ほど前に出たことに眼が引かれる。特に同じように父親の戒めを破っての告白ということ、

それについて比較分析することは近代文芸における「告白文学」の理解に何か役立つかと思う。

凡その隠匿しなければならぬことは公に認められない、あるいは蔑視されることである。これは宗教、秩序などに関して言う点では、所謂「罪」となることがある。「罪」について「広辞苑」

(新村出編著和店
昭和五十一年第三版発行)

「罪」(例文略)

① 悪、穢、禍など、神の禁忌をおかし、その報いを受けるべき凶事。

② 社会の規範、風俗、道徳などに反した、悪行、過失、災禍など。また、その行いによって受ける罰。

③ 刑罰を科せられる不法行為。法律上の犯罪。

④ 仏教・キリスト教で、その教法を破る行為。あるいはその人の背負っている罪業。

⑤ 悪いことや行いに対する自覚、もしくは責任。

⑥ 無慈悲なこと。思いやりのないこと。

「己が罪」で環が父親に隠させられるのは欺かれて子を生んだことである。これが「不貞」「穢れ」と見られるのは「貞女は二夫をならべず」という道徳からであろう。既成道徳違反として環の罪は前述の②にあたる。「破戒」における丑松が打明けてはいけないと戒められるのはその出身である。出身を高貴、卑賤とするのは社会規範の強制である。またそういう規範による偏見の強

制である。丑松は偏見のつくった「よのむか社会的罪人」(「破戒」第二章二)である。その「罪」は②に入るであろう。

この両方の「罪」の性質についてさらに言えば、次の三つの共通点があるように見られる。その一は、いずれも前近代的罪意識によるものである。所謂「不貞」という価値観は儒教的であり、「身分」観念は既に封建的遺物の偏見である。近代に入るに従ってその合理性が失われ、否定されつつあるのである。両作品ともこのような「罪」を不合理として取り扱った傾向性が強いように思われる。罪ではなくなりつつある「罪」を背負って苦しむ主人公であるからこそ、広範な共鳴、時代的反響を引き起し、悲劇的效果があったのである。その二は両者の「罪」はいずれも受身的である。即ち自主的に「罪」を犯したのではなくて、「罪」を背負わされたのである。「己が罪」の環は瞞されてそのような罪の身となり、「破戒」の丑松の出身は生れつきのものであるように強制されたのである。その三は、不条理、受身的とは言え、その「罪」は実在しており、即ちその罪による罰、罪による受難というものがある。環が確かに存在するということである。「不貞」で理想的結婚ができないう「出身」で人並の人生が送れないというのは実際の罰であり、最も注目したいのは、それは父親たちの「戒」の大きな理由となった所である。

(二)

環の父親も、丑松の父親も「罪」の素性に対して、同様に「かくせ」と戒め、その動機について引いて見ると次の通りある。

「傳藏はひたすら娘が未来の幸福を願ふの心に眼眩み、子ある事を他人に知らずはいふ迄もなき事、環自身にさへそを全く忘れしめずば、為悪かるべしと、子を思ふ間の親心……」

(「己が罪」P 129)。「傳藏は三國一の善き婿持たせて、これ迄の苦勞を忘れさせ、身の老をも慰めんと、ただそれにのみ心せかるゝなりしが、一にも二にも皆娘のためと思へば、環の氣に入らぬ男を持たせん心微塵もなく……」(P 130)。「私はお前が善い婿でも貰うて、これならお前の行末を任せても大事ないと安心した上でなければ、死んでも眼はつぶられぬ、私の心も察して呉れといふのは、何も自分の欲をいふのではない、みんなお前のためを思うていふのぢや……」(P 133)。「私の頼みぢや、どうぞ眼をつぶつて黙つて良人を持つてくれ……」(P 134)。

傳藏の「黙つて良人を持つてくれ」という頼みは皆娘の行末、未来の幸福を思う親心からである。丑松の父親の戒めは丑松の「立身出世」「社会から捨てられない」ようにするためのものであることは周知の通りである。

事実を隠すとは一般的に人間の正常の理性と相刺するものと言わねばならぬ。隠匿を特徴とする父親の戒めは守らなければならぬのは、それだけの理由があるものだと思われる。それをまず第

一に親と子の関係に求めて見る。

「黙つてりや、分りツことがないでせうけれども、それでは何だか神様がお許しなさらないやうな氣がいたします」(P 133)「知らない顔をして良人を持つ事だけは、どうしても空恐しい氣がいたします」(P 134)。

というのは環の本心であるが、それに背いて父親の意志にしたがつて結婚したのは「父の感情を害せじ」「父の心を休むるこそ善けれ」「お父さんさへ御安心遊ばされるなら……」というように思つて、自分の幸福のために尽す父親への愛情からのものである。

また、傳藏は男の手一つで一人娘環を育てた父親であり、これはいつそう、通常の親子関係以上にその運命の連帯と感情の連帯を浮彫りにしているのである。さらに傳藏は

「私の身軀はどうなつてもだんないよつて、ここはどこまでも娘の罪を我身に引受、どないにしても嫁入させにや置かぬ、私は神や佛の罰が當つて地獄へ落ちよとまま、娘のためなら悪人になつてもだんない、櫻戸の御前様に疵ものの娘を知らん顔で差上るなど、このような恐しい事はないけれど、何もかも可愛い娘のためぢや、善えわノ、私はしツかりと度胸を極めた、その代りひよつと間違でも出来たら、その時こそどうぞ生先おきなの短い身軀、肩よう皴腹かツ割いてお詫し……」(P 168)。

と命まで賭して決心した所にも守らなければならぬ迫力と権威性

が見られるであろう。

「破戒」では丑松の父親は「功名を夢見る心は一生火のやうに燃えた人であつた。(中略)自分で思ふやうにならない、だからせめて子孫は思ふやうにやりたい。自分が夢見ることは、何卒子孫に行はせたい。よしや日は西から出て東へ入る時があらうとも、斯志ばかりは堅く執つて変るな」(七章六)という執念で、辺僻な烏帽子ヶ嶽の麓の西乃入牧場で牧牛を業として寂しい生涯を辛抱して、臨終になつて「山で葬式をして呉れと言ふのも、畢竟のところは丑松の為を思ふからで」(七章四)ある。この生前死後ともわが子に執念深い希望と情熱をこめた父親の戒めは一度は丑松が膝下を離れる時、一人息子の前途を深く案じて「一生の秘訣」「唯一つの希望」「唯一つの方法」として言つたものであり、一度は遺言として「忘れるな」と言残したのである。この門出の時の教えと死の瀬戸際の遺言の型をとつた戒めの感情世界を支配する徹しさはいつそう父の戒めを徹格的なものにしたのである。

親子、さらに父親と一人娘、父親と一人息子という関係の設定、「三國一の善き婿を持たせる」と、自分は思うやうにならないが、だからせめて息子を思うやうに出世させたいというわが子の幸福を願う情念深い親心、また、命までもかけて、あるいは生前死後とも辛抱して、子の素性を隠す親の恐しいとも言えそうな情熱と執着などの面で「己が罪」と「破戒」は相似点が多くて、その

であるからこそ、その戒めは守らなくてはいけないし、それによつて、両作品の主人公——環と丑松の精神の自由を束縛するだけの力があつたように思われる。

隠匿は親子という関係の権威性によつて維持されるものの、虚偽とながるものである。とくに特定した対象に対してその虚偽性が強く意識されることがあるように思われる。

「己が罪」では、環の夫——子爵櫻戸隆弘は名門の末に生れ、「家門の名といふ事には一種の癖と認められる迄重きを置いて居る」(P 141)家の名のために何ものでも犠牲に供し、情実とか愛情とか恩義とかいふ事は家の名には換えられないと主張する人間である。そして櫻戸隆弘自身の言う所によれば、

「私の性質として偽りと不正とを許さないので、偽りや不正は缺點ではなくて罪悪なのです、」(P 184)

「私の信ずる處では愛情とか慈悲とか、或は同情とかいふものは、みな正ただしいといふことが基礎になつて居るので、心の偽りのある處には愛情も慈悲も同情も成立つものではない」(P 191)

「罪を隠すというのはその罪よりも却てよくない」(P 210)

「私が今日まで一ツの偽りをも許さなかつた事は、貴女はよく御存じの筈です、私はこの非常なる汚れた偽りを、どうして許すことが出来ませう……」(P 325)

とあつて、櫻戸はいかに偽りと不正を憎む人間として描き出され

たか分るのである。この虚偽を憎む櫻戸は、素性を隠せという傳藏の対立面となって一段と環を虚偽と罪意識の間にさいなませ、深刻な精神的苦痛に陥るようさせたのである。

「子爵様の御言葉に、人は包み隠しするのが一番いけない、何事も打明けるに限ると仰しやつたが、そんなお心ならもし打明けて懺悔を申したなら、お許し下さる事かも知れない、隠して置いたなら、あのやうな性質で居らつしやる上は、決してお許しはなさるまい、あゝどうしたら善い事やら……」
(P 175)

「今は懺悔すべき折をたに失へる身の、此上は重ねての折あらん迄、如何にしてもわが身の秘密を包み、良人に仕へまゐらす外なし、さるにても偽りと不正とをば身の仇敵と憎み玉ふ良人に、偽りの身をもて冊かじけるわが身こそ返すべし、も空恐ろしきものなりけれと、われから心に責められて、身は薄氷を踏む思ひの、胸苦しさを何に例ふべき、」(P 185)

「環は自らも妊娠を喜べると、良人が喜びくれたことに、二重の喜びを覚えながらも、心に秘密を隠せる身の、云ひ知れず安からぬ思ひの之に伴ひて起り、殊に良人の所存を聞きより後は、尚今更の如き恐ろしさも加はれるに、ひとりわが居室に戻りて心の中、良人が懐妊を喜んで下さるのほどんなに嬉しいか知らないが、それも妾を偽りの無い正しい女と思召して居らしやるからで、あの通りの御氣質では、若しも偽りの女の腹

に出来た子と、お知り遊ばしたなら、屹度お憎しみなされて、可愛く思召さないやうになるのではあるまいか、もしさういふ事であつた時には折角喜ばれた兒も、妾の罪一ツ故に、向にも知らない身でありながら、悲しい運命に逢はねばならぬとは、何といふ哀れな事であらう」(P 182)

とあつたように環は夫の偽りを憎む性質を思うたびに精神の苦痛が増して来る。
また素性を隠すということは環を愛する慕わしい夫に心を打明け

ることもできないように精神の束縛をし、苦しめたのである。
櫻戸は厳格な人間でありながら、自分の言動を慎しみ、風俗改良、女子矯風運動、慈善事業などをやつて「天下茶屋村の人々は何れも子爵櫻戸隆弘の徳を認ひ、心よりの敬意を表する」(P 184)。また環の過去を知らないまま結婚して心を抜いて環を愛し、大事にするのである。これに対して環は「日を経るままに環は良人の熱き情を身に知りて、いよいよわが身の罪の恐しい」ことを感じようになつたのである。

銀燭の夜に、

「私は今は満身の愛を貴嬢あなたに注いで居るのです、なほ一層此愛情を培ふのは貴嬢のお心一ツで、私は貴嬢の奴隷にもなりません、正義のある處、私の愛の注ぐ處で、正義に結びつけられた二人の中は、何物でもその間を断つ事は出来ないと思ひます、私は熱心に此世でも来世でも、二人の身體こそ二ツ

であるが魂はいつでも一ツになつて離れぬ事を希望するのである」(P 183)

と櫻戸の言うのに対して

「一々胸を貫く熱心なる良人の詞に、環の五体は宛ら木の葉の如く打顛きぬ、さはれ色を失へる顔の、白粉のために目立ざりしこそ幸なれ、良人に答ふべき適當の詞も出ぬまゝに」

(P 183)

とあつた。

また、夫の愛情とともに来るのは恐怖であつた。

「殊に良人の厚き情を被われれば、女の苦しみものゝ限りなる、嫉妬と怨みとに悩まざるゝ事もなく、却て果敢に餘る恐ろしさを思ふ……」(P 196)

「環が良人の熱き情を身に知る事のいよゝ多きに連れて、却て心の底に潜める恐怖の念を鋭くせるも道理なりけり。」

(P 202)

「環はかばかり親切に良人に勞はられ、良人の腕に支へらるゝを、いつもならばいとく嬉しと、思ふべきなれど、今は餘りに罪多き身の上を思つて、良人の身に觸れつゝあることを、いふばかりなく恐ろしと思へるなり」(P 289)

秘密を隠しているから、愛されても恐怖を感じる、またその愛をすなおに受けることができない。愛は隱意と恐怖のある時に成長しないと小説は言っているのである。

「破戒」では猪子蓮太郎は丑松の告白の啓蒙師であり、丑松はその「懺悔録」などの一連の著書を読み、そこから告白の原因となる「精神の自由」などの感化を受けた。一方猪子はまた丑松の思慕敬愛の人生手本でもあり、彼は猪子という真実にいきようとする透明清浄な人格に触れて、初めて良心の痛みを感じ、秘密で暗く塗抹された虚偽な自我を強き意識するに至つた。これも丑松を切実に苦しめたのである。

「猪子蓮太郎先生、頼川丑松より」と認め終つた時は、深く深く良心を偽るやうな気がした(中略)恐しい夢ばかり見つづけた」(六章三)

「其秘密を蔵して居る以上は、仮令口酸くなるほど他の事を話したところで、自分の真情が先輩の胸に徹(たて)へる時は無いのである」(七章二)

「言はうとしては躊躇した。躊躇しては自分で自分を改めた。丑松は心の内部で、懼れたり、迷つたり、悶えたりしたのである」(八章四)

「残念乍ら、丑松は自分で自分を欺いて居るやうに感じて来た。蓮太郎にまで隠して居るといふことは、実は丑松の良心が許さなかつたのである。(中略)『どうしても言はないのは虚偽だ』と丑松は心に落たり悲んだりした」(九章四)

というように、丑松は父親の「隠せ」とはまったく違つた人生態度

度をとった蓮太郎に接して隠す苦惱を感じたり、「戒め」の束縛を意識したり、また、敬愛する師に隠し事があって敬つても親しむことができない、心が通わないという精神的衝突が父親の態度と蓮太郎の態度との対照において一段と克明に描き出されていると思われる。

(三)

長い間、素性を打明けよう、打明けようとして打明けられない苦しみに堪えていた主人公はとうとう親しい人の死をきっかけに、告白懺悔したということも「己が罪」と「破戒」の共通する所である。

「己が罪」では、環は産後の療養を兼ねて家族で房州海岸に行つて、そこで里子となつた虚三との間の子供玉太郎であつた。夫の目を忍んで玉太郎に会つたけれども母子の名乗はできない、可憐な玉太郎のために、断腸の思いをし、「罪却の深きに恐れ」ている。一方、玉太郎は「顔が似ている」とか言われて環は自分の実の母親だ、正弘は自分の弟だと感づき、環を慕い、正弘とも「大人になつたら必ず相共に榎まん」と誓つたりするほど親しむようになった。海辺で遊んでいると、潮に吞まれかけている正弘を見た玉太郎は「己れ自身に取りて、非常に危険なることを知らぬにはあらず、されど彼は自身の危険を念頭に置ぬなり、(中略)彼は是非とも正弘自身のために、はた母と思ふ環のために、必ず正

弘を救はでは止まじと決心せるなり」(P. 309)と悲愴な覚悟で救出にあたる。にもかかわらず、二人とも怒濤のために呑み去られてしまった。それに「心の全く破れたる」環は二人の子を失つたのは「みんな恐しい母の罪が預けない兒に酬いて来た」。「神様の罰の恐しい事」と思いこんで、極度の悲しみに陥り、「此上に罪を重ねることは、もう出来ません、妾は何もかも良人に懺悔します」(P. 318)とついに夫に素性を告白したのである。

「破戒」では、告白しようと思つたがつかない丑松が最後に告白した直接の契機も猪子蓮太郎の惨死である。

其時に成つて、初めて丑松も気がついたのである。自分はその隠蔽さう隠蔽さうとして、持つて生れた自然の性質を鎖懸して居たのだ。其為に一時も自分を忘れることができなかったのだ。思へば今迄の生涯は虚偽の生涯であつた。自分で自分を欺いて居た。(二十章四)

蓮太郎の死が丑松に告白の決心をつきさせたのは明瞭である。

二人の子を失つた後の環の「かう知つたらほんとに母子の名乗をしてやりましたものを……」「あゝその時に打明けて仕舞へば……」といふ自責、「破戒」における丑松の「斯ういふことを知つたら、もうすこし早く(中略)打明けて話したものを。あるひは其を為たら、自分の心情が先蹤の胸にも深く通じたらうものを。」(二十章三)という後悔、いずれも死者の生前に偽善者として対してしまつた主人公の新しい精神の苦痛である。

また環の「恐しい母の罪が頑是ない兒に酬いて来た」「神様の
柄の恐ろしい事」「最早偽りの重荷を負ふに堪はずなれるなり」と
いう所と、丑松の「思へば今迄の生涯は虚偽の生涯であつた。自
分で自分を欺いて居た。」という所は両方ともその死によつておそ
るべき虚偽偽善の罪を犯していた実感、より一層深い罪の自覚を
して懺悔にいたつたのである。

「罪」を背負わされて、また戒められて偽りの罪を犯した環と
丑松の懺悔は父の戒、虚偽に対する否定ではあるが、自身の全人
格の否定ではない所に注目したい。環は「妾の身體こそ汚れて居
りますが、この真心！愛情に汚れはないと存じます。」(P.324)と
懺悔の当時自分の潔白を強く主張したのである。丑松は「正月に
なれば自分等と同じやうに唇蘇を祝ひ、天長節が来れば同じやう
に君が代を歌つて、蔭ながら自分などの幸福を、出世を祈ると言
つたっけ——斯う思出して頂きたいのです。(中略)假令私は卑
賤しい生れでも、すくなくも皆さんが立派な思想かんがへを御持ちなさる
やうに、毎日其を心掛けて教へて上げた積りです。」(二十一章六)
と全人格を捨てなかつたことが認められる。

告白の契機としては、「己が罪」で二人の子の死は偶然の中の
偶然と言いたい。環たちが房州海岸にきて里子となつた玉太郎と
会つたこと、また、正弘が海に溺れかけている所を同跑の玉太郎
が見かけて助けようとしてできなくてともに死んだことは偶然事
件と言わざるをえないような気がする。もっとも、「己が罪」は小

説全体から言つても偶然が目立ち、例えば、環の懺悔を聞いて絶
望した隆弘は海外へ出る。ベトナムで「極めて頑固なる傳染的熱
性病」(P.300)にかかり、台湾で看護婦をしていた環の心をこめ
た看病で助つたという後の夫婦復縁の重要原因ともなつたストリ
ーもそうである。前述の子供の死をも含めて、一連の偶然によつ
てなされた読者への迎合という大衆小説の通俗性が見られるよう
である。

「破戒」の蓮太郎の死は彼の身分を公表し抗争し抗競するなど、
その典型行為をなす所とつながるのであり、その一連の行為の発
展の必然的結果であるように描いてある。不平等な扱いの不当で
ある点からも、抗争の犠牲としても、また特定の政敵のある選挙
応援演説という政治闘争の失敗としても、その死は偶然ではない
ように見える。

悶せという戒め、偽りという罪の意識、懺悔の契機などで、一
致する所の多いその告白は、その最終の結果は違つて来る。環の
告白は一時夫婦間を実質上の離縁に至らせたが、そのち、環が
献身的な愛をこめて、瀕死の隆弘を重病から助けたということも
あって、隆弘は既に罪を悔い改めたものに對しては許さないと
う道理はどこからも見出せないと思つて、「信用し、敬愛する
の念は、前よりも数倍増しました。(中略)今日からはお互ひに過
去の何事をも忘れて、そして希望の光りに導かれて、この温かな世
界の新しい旅に上らうではありませんか」(P.369)という隆弘の

更生と許して二人はめでたく復縁できて幸福が復帰したのである。
丑松の懺悔に対して、同情、理解をする人もだいたいいるにもか
かわらず、それでその町に居にくくなり「職業も捨てなければなら
らん、名誉も捨てなければならん」(二十二章二)という結果とな
って、テキサスへ行くことになったのであった。

環の素性は夫の隆弘一人に対する罪であり、隆弘一人がその罪
を許せばそれで罪滅しになる、すくなくとも夫婦二人だけの婚姻
契約は二人だけの承諾で成立できるのである。それに対して、丑
松は「^{よめが}社会の罪人」(二十二章二)である。公法上で身分関係が
取り去られた場合、その「罪」は「社会」の規範の罪ではなくな
り、またもともと宗教世界の罪と遊離したものであるゆえに、そ
の「罪」は世俗の普遍的偏見によるものではなからうかと思う。
であるならば、法的承認、宗教的「愛」「慈」などがあるにして
も、丑松の幸福の復帰は偏見の消失を待たなければならず、ある
いは、偏見から脱出しなければならぬのである。

(四)

懺悔者の懺悔に至るまでの精神活動は隠しによる精神の拘束及
び虚偽に対する罪意識を特徴とし、虚偽からの解脱、精神の拘束
からの解放など、精神の自由の獲得を目的とする。環の懺悔の最
後に、

「この身はどうなされませうと少しもお怒みに存じません

が：この精神の自由だけはどうぞお許し下されまして：」
とあって、懺悔の後の丑松は

324)

「二六時中忘れることの出来なかつた苦痛は僅かに胸を離
れたのである。今は鳥のやうに自由だ。」(二十三章一)

とあった。しかも、環も丑松も素性隠匿に対して、「良心の責責」
という倫理的意識が含まれているが、環の場合とはくに「神様が
お許しなさい」という宗教的精神からのものが目立つのである。
隆弘が最後に懺悔をした環を許した理由は、彼が聖書に慰藉を
求め、煩悶の結果翻然として一道の光明を見出し、「既に
罪を悔い改めたものに對しては基督を始め、(中略)あらゆる神、
あらゆる宗教はみなその罪を許して居るのです。然るに遙かに神
に及ばぬところの人間がこれを許さないといふ道理はどこからも
見出せない。」(P 366)と悟った所にある。これは作品が懺悔告
白の合理性に対する解釈の一つであるようにも見られる。これに
對して「破戒」の懺悔告白の底に流れるのは「自然の性質を銷磨
して居た」という自然的精神である。

「破戒」の時代から、百十三年間ほどさかのぼると、フランス
近代の啓蒙思想家——ルソーの著した「懺悔録」(「懺悔録」レヤン、
石川巖蔵訳昭和五)があった。この近代における最初の告白文学と
言われるルソーの自伝小説は人間が太古から私語していた己れの
ことを文学という公器によってあらわに語ろうとしたのである。

「これこそは自然のままに、まったく真実のままに正確に描かれた唯一の人間像」と書きはじめられているこの自伝小説はルソーの生れてから五十三歳までの経歴及び、五十三年間の幸福と不幸、屈辱と誇り、努力と挫折、すべての感情を書いたものである。とくに、彫刻師の家で窃盗する、リボンを盗み、少女マリヨンに罪をなすりつけて生涯の奇貨となる。女中テレーズに五人の子を生ませたが育児院に捨て後悔の種となる。といったルソー自身の卑小と不良が書かれたところはこの「懺悔録」の大きな特徴となる。作者は「懺悔録」で「私は自己の懺悔を約束したが、自己の辯護は約束しなかつた。(中略)私は眞實でありさへすればいいのであり、讀者は公平であればいいのだ。私はそれ以上の何物をも讀者に求めない。」(同上中巻P524)と言っている。ルソーの動機には、自己の内部を裏面を、ことごとくさらけ出すことによつて、自己の辯護ではなくて、人間の眞実を弁証しようとする意図があった。

藤村がルソーの「懺悔録」に初めて接したのは明治二七年の夏であった。近代的自我に目覚させた「懺悔録」について、藤村は「ルウソオの「懺悔」中に見出したる自己」で次のように語っている。

「私はその頃、いろいろと艱難をしてゐた時であつた。心も暗かつた。で、偶然にもルソオの書を手にして、熱心に読んで行く内に、今迄意識せず居た自分といふものを引出

されるやうな気がした。(中略)籠氣ながら、此書を通して、近代人の考へ方といふものが、私の頭に解るやうになつて来て、直接に自然を観ることを教へられ、自分等の行くべき道が多少理解されたやうな気がした。(中略)ルソオの自然に對する考へは、今日から見れば論難すべき余地がある。中略)しかしながら、眞に束縛を離れてこの「生」を觀ようとするその精神の盛んなことは又一生その精神を続けたといふことは、遂に私の忘れることの出来ないところだ。(中略)ルソオは「自由に考へる人」の父であつた。近代の人の卵はここに胚胎して居る。(中略)彼の「懺悔」は矢張り吾々と同じやうに、失望もすれば落胆もする弱い人間の一生の記録だ。(中略)彼の「懺悔」を開いて、到る処に自己を発見するところが出来る。」(石川四郎次「懺悔録」)

「自然のまま」「眞実のまま」「直接に自然を観ること」という自然認識を、束縛を離れての自由思考、自己発現のできる「近代」的価値観として藤村は受けて、「眞実の告白」という文学方法を確立したであろうと思う。失望もすれば落胆もする弱い人間であっても、「眞実でありさへすればいい」という近代的人間解放の典型として「破戒」の丑松が造型されたのであろう。

(五)

人間精神の近代化はまず自己が他から束縛されることから解放

されることによつてもたらされる。環を丑松を縛りつけていた父の戒めから二人が解き放たれたが故に自己の近代化が果された。しかし人間社会における其の近代化は、社会全体の因襲からの解放をまたねばならない。先に指摘したように環の懺悔は一家庭内に限定されたものであつた。であるが故に、夫櫻戸の改悛によつて悲劇が回避される。それに対して丑松の場合は、長い封建時代の因襲による差別であるが故に、その面での社会的な改革が進められねばならない。猪子蕪太郎の死は、積極的にそれを進めようとする努力の挫折を意味している。日本の明治時代は個人個人の意識の近代化に対して社会の近代化が一向に進まなかつた。その点のくいちがいに對して、藤村の告白文学は、一つの行きつまりをみせている。丑松をアメリカのテキサスへ送るといふ構想は、社会と正面から対決しない苦肉の策である。藤村の自己解放が悲劇を呼ばなかつたのは、藤村の一時的な逃避によるのである。小説「春」の青木（北村透谷）の死のあと主人公岸本捨吉は仙台に旅立つ。

岸本は藤村の分身である。その後藤村は小諸時代を経て「破戒」を執筆する。「破戒」の後は、その社会的矛盾を解決することなく、私小説へ転身する。姪との不純な恋の清算過程を書いた「新生」では、節子を捨ててフランスに旅立ち、再出発をはかる。藤村が逃げ場所を外国に求めたことは丑松をテキサスに送る趣向と一致する。藤村はそうした消極的な方法によつて、最終的な破局を回避しつつ生き続けた。この点で、殆ど自殺に近い死をとげた

石川啄木や、自殺の方法で自己矛盾を解消した有島武郎や芥川龍之介等にくらべて、藤村は「生」を見つめて辛抱づよかつたといえる。しかし、最後の「夜明け前」に至り、青山半蔵は、どこへも脱出することができず、座敷牢で悶死する。青山半蔵の狂死は社会改革の進まぬ日本の近代化に対する藤村の焦慮のあらわれであつたと言える。

参考文献

『己が罪』(『明治大正文学全集』第十八巻)

春陽堂昭和三年六月十五日発行

『破戒』

(『現代日本文学大系』13 藤村著 村松道平編 筑摩書房昭和五十四年四月二十日発行)

(遼寧外國語師範專科學校)

陳光は、中国遼寧省遼陽市遼寧外國語師範專科學校から派遣された留学生で、一九八七年四月から翌年三月までの一年間、岡山大学に研究生として在籍した。その間、日本文学殊に近代文学に関心を寄せ、日本の近代化に及ぼした文学の役割について勉強した。日本にとつて、明治という時期、殊にその三十年代は強固な封建性と個人の自覚の烈しい葛藤を演じた激動期である。陳光は、個人の自由を束縛する父の力に着目し、父の戒を破つて新世界を開拓する小説として菊池幽芳の「己が罪」と島崎藤村の「破戒」を比較し、その共通点及び相違点を明らかに

した。これは日本人のいまだ気づかなかった斬新な視点で、明治文学の研究に一石を投じたものとして評価できる。

(赤羽 学)

研究室受贈図書雑誌目録(二)

- 字部国文研究(字部短期大学国語国文学会) 第十九号
愛媛国文と教育(愛媛大学) 第十九号
大阪青山短大国文 第四号
大谷女子大国文 第十八号(玉上琢弥先生退職記念特輯)
大妻国文(大妻女子大学) 第十九号
大妻女子大学文学部紀要 第二十号
学苑(昭和女子大学) 第五百六十六号
活水日文(活水学院) 第十七号
活水論文集 第三十一集
金沢大学教養部論集 人文科学編 25ノ2、26ノ1
金沢大学語学文学研究 第十七号
岐阜女子大学紀要 第十七号
金城国文(金城学院大学) 第六十四号
近代文学研究(上智大学) 第六集
芸術論集(大阪芸術大学芸術学部文芸学科研究室) 第三号

研究紀要(尚綱大学) 第十一号

研究紀要(日本大学人文科学研究所) 第三十五号

研究と資料(国語学研究与資料の会) 第十一号

言語学論叢(筑波大学一般・応用言語学研究室) 第六号、第七号

言語文化(一橋大学語学研究室) 第二十四号

高知大國文 第十八号

甲南国文(甲南女子大学) 第三十五号

甲南大学紀要 文学編 68

風間力三先生退職記念文集(甲南大学国文科同窓会)

国語学研究(東北大学) 第二十七号

国語研究(岡山大学教育学部国語研究会) 第二号

国語研究(上越教育大学) 第二号

国語研究(横浜国立大学) 第六号

国語国文(金沢大学) 第十三号

国語国文(東海学園女子短大) 第三十三号

国語国文学(名古屋大学) 61・62

国語国文学会誌(学習院大学) 第三十一号

国語国文学会誌(福岡教育大学) 第二十九号

国語国文学研究(熊本大学) 第二十四号

国語国文学誌(広島女学院大学日本文学会) 第十七号

国語国文学報(愛知教育大学) 第四十五集、第四十六集